

わたしの聖戦

女性が働くということ

医学ジャーナリスト・医学博士

植田美津恵

連
240
載

日常生活の中のAI

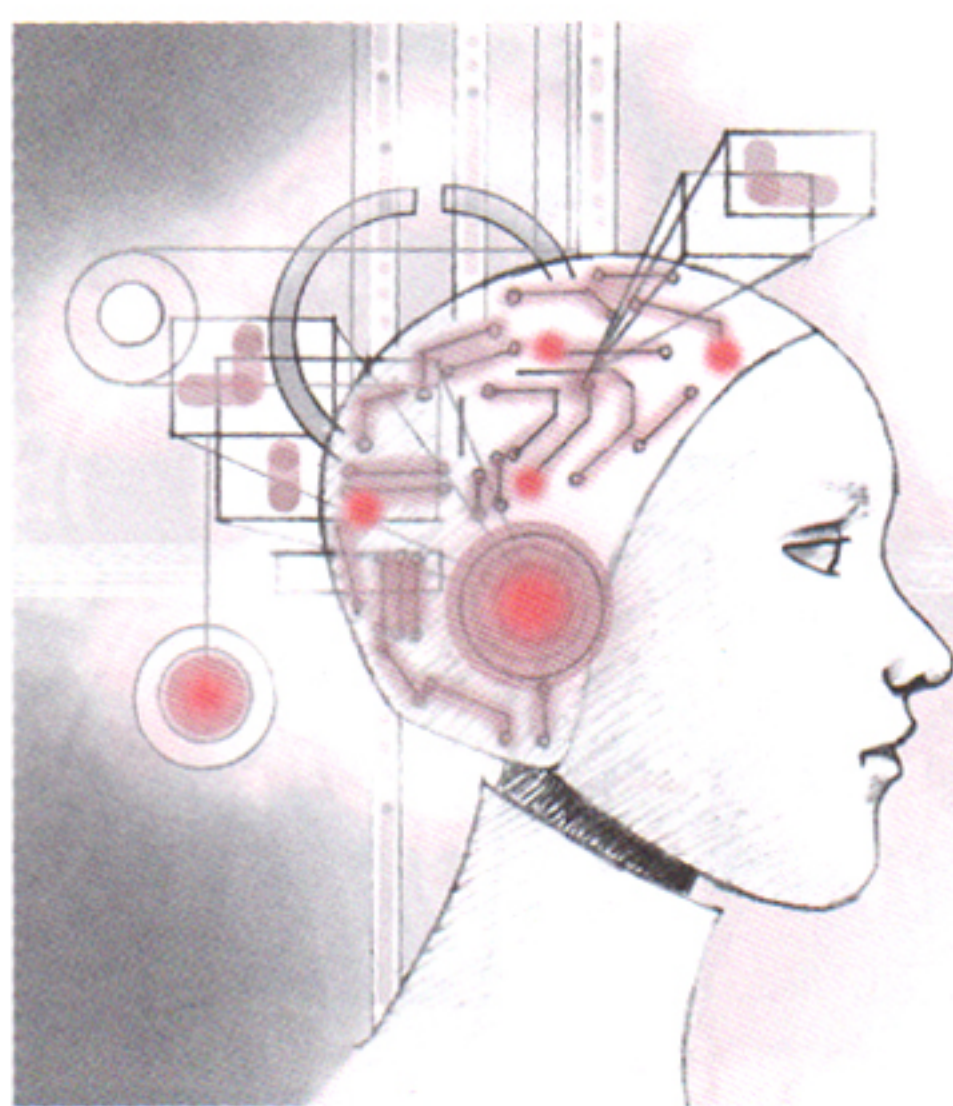
AI、つまり人工知能が話題にのぼるようになって久しい。当時は、AIの発達によって仕事が奪われるのだ、人間との共存をどうはかるべきかといった論調が目についたが、それも今やほとんど耳にしない。AIに興味がなくなつたわけではなく、それだけじわじわとAIは私たちの生活に入り込んでいたためだと思う。

スピルバーグ監督の映画『AI』が公開されたのは、2001年のことだから、かれこれ20年以上が経っている。人型ロボットとして誕生した男の子は、本物の子どもの病が回復したことであつ

さり親から捨てられる。その後、他のロボットたちとの出会いや別れを繰り返して、ロボットなりに成長を遂げるが、最後は母親（母親を愛するようプログラムミングされている）とともに人間らしく眠りについて、ジ・エンドとなる。主役はAIで、人間の身勝手さに翻弄されるロボットの悲哀がにじみ出るような映画だった。

医療の現場では、問診票にAIを活用したり、大腸内視鏡の先にあるAI機能ががんを見つけるとブザーで教えてくれたり……といったように人間の能力では限界がある点をカバーする形でぼち

ぼち身近にAIを感じるようになってきた。近頃では、全国チェーンのファミレスにロボットが登場し、料理を運んだり下げたりしてくれる。ひそやかな音を流しながら、店内をスルスル移動するロボットは顔が猫のようであり、なかなか微



とんどにAI機能が付いていることもわかった。その機能は、値段が高いほど複雑な機能を持っているようで、改めて冷蔵庫がただ単に食材を冷やしたり氷を作ったりするだけではないことを思い知った。

冷蔵庫の中身から献立を提案してくれたり、スーパの特売情報を教えてくれたり、食材の適切な保存法をアドバイスしてくれたり……機能が高度化すればするほど操作も複雑になるわけで、はつきりいって「これ、必要？」と思うものもなきにしもあらず。

笑ましい。が、物珍しかつたのは最初だけで、あとはもう日常の風景と化し、何の感情もなくなつた。最近、かなり使い古した冷蔵庫がいよいよダメになり、新しく買い替えることにした。値段の高いことにも驚いたが、ほ

ほとんどの扉がガラス板で覆われているために、かつてのようにマグネットでベタベタと紙を貼ることはできないようになっていく。学校の献立やら行事やらスケジュール表やらレシピアやら、そんなものであふれていた冷蔵庫はもはや存在しない。

おおげさにいえば日本のダイニングキッチン風景が変わってしまったようで、寂しい気持ちがないわけではない。しかしそれもすぐに慣れてしまふのだろう。

困るのは、電話の案内音声かAIである場合だ。AIの声で「：でしようか。はい、か、いいえ、でお願いします」と言われ、「はい」「そう」などと電話で答えていく。これはもう会話ではなく、相手に合わせてこちらもAIになった気分。これでもまた、敬語が使えないとかコミュニケーションが苦手だとかいう人が増えていくと余計な心配をしてしまう。

AIとうまく付き合うにはこちらもある程度AI化しなければならぬ。いわば歩み寄りである。20年前の映画『AI』の時代とはまた違ったAIの世界が、すぐそこまで迫り来ようとしている。イラスト・伊藤香澄